

繪 畫

不同舎に入り、圖畫教員をしてゐたが卅三年、河合、満谷、丸山等と渡米し、翌年パリに赴き、ジャン・ポール・ローランスに師事し、卅七年歸朝して、中澤岩太、淺井忠等と共に關西美術院を設立し、卅九年再びパリに留學し、四十一年歸朝し文展の審査員となつた。滯佛中の作品「少女像」、「ノルマンチーの漁夫」、「漁夫の家」はアルチスト・フランセーのサロンに出品され、「ローランスの肖像」は第二回文展に出品した。大正四年三度パリに遊び七年歸朝後、製作の傍後進を誘導してゐる。青山は初め山本芳翠に學び、美術學校洋畫科を卒業し、四十三年の白馬會に出した「アイヌ」を出世作とし、第四回文展の「九十九里」三等賞となり、第五回文展の「金佛」は二等賞を得た。後渡佛八年間在佛歸朝し、十五年第七回帝展に「牛」を出して院賞を授けられた。石井は鈴木鷺湖の孫、石井鼎湖の子として生れ、淺井忠に學び、四十四年渡歐し、滯歐中の作品として第五回文展に水彩の「サン・ミツシエル橋」を出し、

明治大正時代

第六回文展にテムペラの「和蘭の子供」と水彩の「獨逸の女」を出品し、歸朝後第七回文展にテムペラの「滯船」と油繪の「N氏の一家」とコンテの「並藏」を出して「滯船」は二等賞を得た。翌年同志と文展を去つて二科會を組織し、爾來二科展に出品し、其中心人物となつてゐる。大正十三年再び渡歐し、旅中の作品も多い。油、水彩、テムペラ、日本畫、詩、文ゆくとして可ならざるなき才能を示してゐる。石川は小山の不同舎に學び、太平洋畫會、内國博覽會等に出品してゐたが、文展には第一回より入選し、第七回に「港の午後」、「雨やんだ朝」を出し、「港の午後」は二等賞を得、帝展となつて最初から委員をつゞけてゐる。大正三年第八回文展に際して、洋畫部にも日本畫部と同じく二科制を設けん事を當局に具伸して容れられず、文展と分れて二科會を設立した者は、石井柏亭、有島生馬、齋藤豊作、湯淺一郎、山下新太郎、坂本繁二郎、津田青楓、梅原龍三郎等であつた。同年第一回展覽會を開き、爾來毎

繪年開催してゐる。會員は其後出入があつて、大正十五年に於いては前記の人々の外、正宗得三郎、熊谷守一、小出楢重、國枝金三、黒田重太郎、鍋井克之、安井會太郎、中川紀元、横井禮市等がある。猶同會はアスラン、ピツシエール、ロートなどフランス中堅作家を會員に加へ、その作品を展覧してゐる。二科會は大正十五年第十二回を開いたが、此會に屬する人は猶將來に活動すべき人が多いので物故した人を擧げて置く。湯淺は山本芳翠、黒田清輝に學び、當時の白馬會出品は既に記したが更に美術學校に入り卅一年卒業、卅八年渡歐し、四十二年歸朝した。滯歐中は大作を模寫し、第五回文展に「午睡」を出品した。昭和六年歿した。小出は二科の生んだ畫家である。裸體を描くに一特色を有したが、昭和六年四十五歳で夭折した。猶二科に屬する人の文展時代以後の代表作を擧げると、有島に「宿屋の裏庭」(第五回)「藤村氏の肖像」(第七回)、齋藤に「秋の色」(第六回)、「夕映の流」(第七回)、山下に「窓

5  
4

代時正大治明

際」(第五回三等賞)、「マンドリーヌ」(第六回)、坂本に「うすれ日」(第六回)、「魚を持つて來て呉れた海女」(第七回)、津田に「五月のインクライン」(第七回)、梅原には「黄金の首飾」(大正二年作)、正宗に「モレー風景」(大正十年から十三年迄再度滯佛中の作)、熊谷に「蠟燭」(第二回)等がある。大正三年院展分離の際、小杉未醒が加はり、ついで森田恒友、長谷川昇、山本鼎、倉田白羊、後に足立源一郎も加はつたが、九年に脱退し、十一年に至つて春陽會をつくり、梅原も加はつた(後梅原は國展を作る)。文展後期(第八回以後)に名を出した作家には、白瀧幾之助、太田喜二郎、長原孝太郎、三宅克己、柳敬助、金山平三、石橋和訓、牧野虎雄、大久保作次郎、大野隆徳、田邊至、齋藤與里、袖木久太、片多徳郎、小糸源太郎等がある。長原は小山、黒田の教を受け、四十年の東京博覽會に「停車場の夜」を出して三等賞となり、文展には第八回の「残雪」が三等賞に、第九回の「晩春」が二等賞となり、第十回には「初夏」を

繪 畫

出し推薦せられ、帝展には第一回から委員となつたが、昭和五年歿した。白瀧は山本芳翠、黒田に學び、卅一年美術學校洋畫選科を卒へ、卅七年渡米しヴォンノーに學び、のち英國に渡りヒューツに就き、更に佛國に赴きコランに學び、四十三年歸朝した。三十年第二回白馬會に出品した「稽古」は既に擧げたが、第八回文展に出した「野村氏の像」は二等賞を得、帝展第二回以來委員となつた。太田は四十一年美術學校洋畫科を卒業し、直ちに白耳義に赴き、エミール・クロスについて學び、大正二年歸朝、第八回文展に「歸り路」を出して一躍二等賞となり、第九回の「薪」も亦二等賞を得た。クロスの點描派を學んだ畫風が特色として眼立つた。第十回に推薦となり、帝展第一回から委員となつた。太田が白耳義に學んだのは珍らしいが、他には兒島虎次郎がある。卅七年美術學校洋畫科選科の出身で、長く歐洲に在り、白耳義を中心として學び、大原孫三郎の爲めに近代現代大家の作品を選択購求し、所謂大原

明治大正時代

コレクションとして現に倉敷に於いて一部が展觀されてゐる、昭和五年歿し、遺作も主に倉敷に在る。三宅は明治學院の出身で、繪を會山に學び、次に原田につき、水彩畫家として立ち、卅年から二年間歐米を廻り、歸朝後、明治美術會、ついで白馬會に發表し、卅五六年頃又渡佛した。四十年東京博覽會に「雲」を出して二等賞を得、文展には第五回に「白耳義の田舎」、第七回に「河岸」を出し第九回の「冬の小川」は二等賞となり、第十一回には推薦せられた。金山は四十二年美術學校洋畫科を卒業し、佛國に留學し、歸朝後第十回文展に「巴里の街」と「夏の内海」を出して特選となり、第十一回文展の「氷すべり」又特選となり、第十二回に推薦せられ、帝展委員となり、第三回に「菊」を出した。石橋は初め瀧和亭に學び、卅六年英國に赴き、四十年倫敦のローヤル・アカデミーを卒へ、長く同地に滞在し其後歸朝し、昭和三年五十歳で歿した。英國風の肖像畫に巧で、第二回文展に「ものおもひ」、第三回に「美人讀書」を

繪 畫

出して共に三等賞を得、第十二回に推薦せられ、帝展となつて第五回から委員に挙げられた。文展で其後審査員に新任されたのは、第十回に和田三造、南薫造の二人で、帝展となつて新たに委員となつたのは第一回に石川、太田、金山、長原、第二回に小林(萬吾)、白瀧、第四回に辻、第五回に永地秀太である。又文展の最後から帝展となつて名を出した主な者には、高間惣七、熊岡美彦、安宅安五郎、清水義雄、富田温一郎、小柴錦侍、中村研一、遠山五郎、前田寛治等がある。最後に文展第八回以後の記憶すべき作は、片田徳郎の「夏山急雨」(第八回)、「婦女沐浴の圖」(第十回)、「妓女舞踊之圖」(第十一回特選)、山脇信徳の「午後の海」(第八回)、辻永の「初秋」(第八回三等賞)、「落葉」(第九回同上)、「葡萄の實る頃」(第十回特選)、高間惣七の「養鶏場」(第八回)「夏草」(第十二回特選)、大野隆徳の「麥はたき」(第九回三等賞)、「高原に働く人」(第十回特選)、牧野虎雄の「紅葉の下湯」(第九回三等賞)、「溪流に水浴」

(第十回特選)、「麥扱く農夫等」(第十二回特選)、齋藤與里の「收穫」(第十回特選)、田邊至の「雲の影」(第九回三等賞)、「七面鳥を飼ふ人」(第十二回特選)、柚木久太の「入江」(第九回三等賞)、「湖雲一帯」(第十回特選)、熊岡美彦の「母と子の肖像」(第九回)、小寺健吉の「水郷初夏」(第十回)、大久保作次郎の「三月の日」(第十一回特選)、「とげ」(第十二回特選)等であるが、之等の作家は猶昭和時代に活動してゐる人が多く、代表作も次の時代を飾るものが現はれるであらう。猶大正元年第一回を開いたフューザン會の中心となり、四年頃から出來た草土社の中心となつた岸田劉生(昭和五年歿四十歳)と四十二年美術學校を卒業し、數年にして渡佛し、遂に彼地で頭角を現はし、パリ畫壇で認められた藤田嗣治との名を擧げて洋畫の項を終る事とする。

明治大正時代

#### 四 工 藝 美 術

概観

工藝美術は前代も相當發展したが、其末葉から當代初期にかけては、建築、彫刻、繪畫と同様大に衰退し、暗黒時代たらざるを得なかつた。前代の名家は年既に老い、當代に入つて間もなく逝き、他に偶々腕のある者があつても需要が全く無いので、徒に手を拱いてゐる許りであつた。當代初期に逝いたものは、彫金家に後藤一乘（九年、八十六歳）、漆工に玉楮象谷（二年、五十八歳）、中山胡民（三年）、陶工に加集珉平（四年、七十六歳）、奥田木白（同年、七十二歳）、高橋道八（十二年、六十九歳）、三浦乾也（廿二年、六十九歳）、金工に初代秦藏六（廿六年、八十四歳）、其他小川破笠（廿二年、六十九歳）柴田是眞（廿四年、八十五歳）がある。而して六年（西曆一八七三年） 壘國維納の萬國博覽會に参加して、始めて我國の工藝を歐洲に紹介し、又數人の工藝家は政府の命によつて派遣せられ、彼地の實際を見學し、これらは第二期に進歩する原因となつた。次に十年には第一回内國勸業博覽

會開かれ、暗黒時代に一道の光明を放けたが、作品は輸出的のもの多く、まだ藝術的價値は低いものが多かつた。之より先き松尾儀助が起工商會社を起して鑄金、蒔繪、木竹、牙角等を製作したのは七年であるが、十年の博覽會に於ける工藝審査に當つた圖案家岸光景は、其不振を嘆じ、振興策として同年精工社を創立し、當時の名工を集め、宮内省の御用を始め、各會に出品の工藝品を作らしめた。又十三年には大藏省商務局に製品圖案協議員を置き、岸光景を主任とし、當時の著名な畫家に工藝圖案を作らしめ、其圖案を各府縣の工藝産地に分つて製作せしめ、之を十四年の第二回内國勸業博覽會に出品せしめ、漸く進歩發展の第一歩を踏み、かくて第二期に入つた。第二期に入るや二十年頃から國粹保存の聲高まると共に、從來の日本美術が認められ、之が復興も説かれ、又外國博覽會に出品して外國人に賞讃せられ各種の工藝美術が一時に勃興した。しかし外國人に賞讃された事は、勢ひ外國人向のも

のを奨励する事となり、作家も日本趣味を忘れて、外人の趣味に迎合し、却つて淺薄のものとなる傾向があつた。しかし第三期となつては作家も漸く自覺して日本固有の趣味、技法に立脚し、外國の長を採つて進歩を助けるに至り、第四期に入つては彫刻、繪畫に文展が開かれると共に一層發達を示し、大正七年文展の終る頃には、文展に工藝を加へるの議が起り、國民美術協會の建議となり、津田信夫、藤井達吉等は時の文相岡田良平に會見して其賛成を得、余も「文展と工藝美術」なる一文を『讀賣新聞』に發表した。而して文展は帝展となり、其第八回、昭和二年に至つて第四部として工藝が加へられるに至つたのである。

第二期以後の變遷

第二期の初頭明治二十年には大日本織物協會主催の第一回織物品評會が開かれた。翌廿一年龍池會は上野に陳列館を新築し、日本美術協會と改稱して第八回展覽會を開き、始めて工藝品も陳列された。此年

宮内省に九鬼隆一を委員長として設けられた臨時全國寶物取調局は、彫刻、繪畫を主とはするが工藝にも及び、廿九年古社寺保存會となるや、法隆寺金堂の玉虫厨子、天蓋、橘夫人念持佛厨子の如きは最初に國寶として指定せられ、國費を以つて、修繕せらるゝ事となり、古典的工藝の研究も行はれ、復古的意匠の優れたものも作らるゝに至つた。翌廿三年は工藝界にとつて最も記憶すべき年である。夫は十月帝室技藝員の制が設けられ、畫家七名と共に工藝家三名が選ばれた事と、東京美術學校が創立せられ、金工、鑄造、漆工等の科目が設けられた事である。帝室技藝員に選ばれたのは彫金の加納夏雄、畫家で蒔繪工の柴田是眞、織物の伊達彌助で、廿六年に至り陶工の清風與平が選ばれ、廿九年となつて彫金の海野勝珉、陶工の宮川香山、七寶の濤川惣助、同並河靖之、鑄工の鈴木長吉、蒔繪の川之邊一朝、同池田泰眞、卅一年には織物の川島甚兵衛が選ばれた。美術學校では工藝に對する秩序ある教育

を施し始め、其第一回卒業生は廿六年に漆工科一人を出し、廿七年に金工科三人、鑄造科四人、漆工科六人、廿八年に金工科二人、鑄造科三人、漆工科二人といふやうに少數ではあるが、年々出す卒業生によつて第四期以後に其實が結ばれつゝある。又廿三年には第三回内國勸業博覽會が開かれ、相當の進歩を示した。廿五年には大日本窯業協會起り、日本漆工會は第一次漆工競技會を開いた。廿七年には佛國里昂、白耳義リエージ、シカゴ、桑港等に博覽會が開かれた。又廿八年には第四回内國勸業博覽會が京都に開かれ、始めて審査が行はれ、第二期の成績を示す機會を與へた。内國勸業博覽會の出品は此の第四回以後やゝ衰へて來た。第三期に入つて第一に刺戟を與へたものはパリに開かれた一九〇〇年(卅三年)の萬國博覽會で、政府も賛同し出品した。次に卅三年に日本金工協會起り、翌年第一回競技會を開き、同年日本圖案會創立され、卅六年大阪に第五回内國勸業博覽會が開催され、同年東京鑄金會

第一回展覽會を開き、卅七年米國セントルイスに萬國博覽會が開かれ、賛同出品をなした。而して此期には教育機關が増加した。東京美術學校も卅一年始めて圖案科の卒業生を出し、金工、鑄造、漆工の三科と共に年々卒業生いで、東京高等工業學校は卅四年に東京工學校を改正して生れ、本科に工藝圖案科があり、附設工業教員養成所速成科に金工、木工、陶器、漆工の諸科を置かれ、京都高等工藝學校は卅五年開校し、圖案、色染、機織の三科を設けた。此の二校は東京美術學校と共に官立で、工藝美術に關して最高の學問と實際とを教へ、更に京都市、石川縣、香川縣、富山縣に中學程度の市縣立工藝學校が開かれ、又瀬戸と有田に陶器學校があり、全體として工藝美術教育の機關は本期に成り、第四期以後に其効果を現はしてゐる。かくして第四期に至り、明治初葉以來の大家は殆んど歿し、新進の作家が漸く昂頭して來た。大家の歿したのは、伊達彌助(廿五年五十四歳)、竹本隼太(同年四十五歳)、

森川杜園（廿七年七十五歳）、池田眞哉（廿八年）、加納夏雄（卅一年七十一歳）、池田泰眞（卅六年七十九歳）河之邊一朝（四十三年八十一歳）、濤川惣助（同年六十四歳）、川島甚兵衛（同年五十六歳）等である。四十年三月東京勸業博覽會が上野に開かれ、繪畫、彫刻の外工藝も出品されたが、前にも述べた通り、第五回内國勸業博以來博覽會は必しも最高の標準とは云へなくなつた。それよりも四十二年に東京美術學校長正木直彦を會頭とし、津田信夫、菅原直之助を幹事とし、建築家彫刻家及び畫家を交へた工藝家の團體吾樂會は、會員古宇田實の設計になる京橋八官町の陳列所吾樂殿に於いて、各々自由な立場から藝術的の香り高い作品を發表した。會員は工藝家として、金工の香取秀眞、石田英一、津田信夫、漆工の赤塚自得、磯矢完山、豊川揚溪、堆朱揚成、石井吉次郎、陶工の板谷波山、幹山傳七、刺繡の菅原直之助、彫刻家に沼田一雅、内藤伸、圖案家に千頭庸哉、小場恒吉、藤井達吉、建築家に武田五一、

大澤三之助、中條精一郎、古宇田實、大江新太郎、岡田信一郎、洋畫家に岡田三郎助、和田英作、津田青楓、日本畫家に結城素明、平福百穂、渡邊杏涯、福井江亭があり、外に美術學校教授の岩村透、ステインドグラスの小川三知、パトロン格の小林傳次郎が加はつてゐた。一方京都では卅九年京都工藝學校長中澤岩太の肝煎で遊陶園を創立した、其園友には陶工として錦光山宗兵衛、清水六兵衛、宮永東山、伊東陶山、河村蜻山、澤田宗山、高橋清山の外、武田五一、鶴卷鶴一、本野精吾、神坂雪佳、陶磁器試験所の植田豊橋、福田直一等があり、四十三年頃から同じく京都漆工家の新團體たる京漆園と、染織家の道樂園と相提携して、農商務省商品陳列館に毎年三園展覽會を開催し、大正十年からは九年に設立された研究團體たる時習園と結んで四園展覽會として開會した。又農商務省では大正二年大臣牧野伸顯、工藝の發展には意匠圖案の奨勵の肝要な事を感じ、大久保商工局長、鶴見商品陳列館長などに計



劃せしめ、第一回圖案及應用作品展覽會を開き、文展に對して農展と稱され、大正十二年工藝展覽會と改稱し、商工省となつてから商工展として猶續けられてゐる。猶新しい傾向の團體に大正十四年創立の凸凹會と十五年設立の无型とがある。後者の同人には、藤井達吉、廣川松五郎、高村豊周、松田禾堂、佐々木象堂、北原千祿、山本安曇、西村敏彦、豊田勝秋、杉田權六、山崎覺太郎等、帝展工藝の新方面を代表する中堅作家を多數含んでゐる。又十五年工藝の普及及び改善を主旨として日本工藝美術會が設立され、同年第一回展覽會を新築の東京府美術館工藝室で開催し、翌年帝展に第四部開設の先驅となつた。大正十一年以來毎年開催の佛蘭西現代美術展覽會には、セーヴルの陶器を始めとし、ラリツク、ドーム等の玻璃器を多數將來し、一九二五年（大正十四年）巴里に開かれた萬國裝飾美術展覽會に出品せられた新傾向のものも將來せられ、大に我が工藝界を刺戟し、影響を與へた。この佛展は昭和三

年大規模に室内裝飾及び家具を展觀し、大にセンセーションを起したが、それは昭和時代に屬する。帝室技藝員は第四期にも新たに任命された。それは卅九年に蒔繪の白山松哉、彫金の香川勝廣、刀劍の宮本包則、同月山彌五郎、篆刻の中井敬所、圖案の岸光景、大正二年に彫金の塚田秀鏡、同六年に陶工の伊東陶山、同諏訪蘇山、鍛金の平田宗幸等であるが、大正十五年までに悉く物故した。次に工藝の種類に従つて主な作家を擧げて置く。

金工

金工の内、彫金には加納夏雄、香川勝廣、中里則長、海野勝珉、塚田秀鏡、海野美盛、清水龜藏、鍛金（鏈起）に平田宗幸、山田宗美、石田英一、鑄金に秦藏六、鈴木嘉幸、後藤貞行、岡崎雪聲、大島如雲、香取秀眞、津田信夫、佐々木象堂、山本安曇等がある。其中夏雄は京都で池田孝壽の門に入つて彫金を學び、傍ら來章に畫を習ひ、後東上して明治廿六年御料の太刀の金具を彫つて名聲大に揚り、廿三年美術學校教授となつた。

四條圓山の畫風を應用して片切彫に一生面を拓いたのは其功である。遺作としては象嵌片切「月に雁の圖」額面(帝室博物館藏)、片切手本十二枚(東京美術學校藏)がある。其門から香川勝廣が出た。勝廣も師夏雄を助けて御劍の裝飾に従ひ、夏雄歿後、門生と共に努めて卅八年完成した。卅一年美術學校教授となる。遺作には「猿猴の圖」高肉額面(帝室博物館藏)、「和歌浦圖」(宮内省藏)がある。勝珉は萩谷勝平に學び、廿七年美術學校教授となつた。第三回内國勸業博に出した「蘭陵王」は妙技一等賞を得、御物となつてゐる。其他内外の博覽會に出品し金銀銅牌百數個を有する。秀鏡は初め彫金を勝見完齋に學び、傍ら繪を是眞に習ひ、後夏雄を師とした。遺作は十八年獨逸バイエルン金工萬國博に出品し同國美術館に在る「落雷之圖」、廿一年伊勢皇太神宮寶劍、又明治大帝御劍の裝飾にも夏雄の助手として與つた。美盛は水戸派の彫金工起龍軒美盛の門人海野盛壽の子で、初め繪を酒井道一に習ひ、次に曉

齋に、後に景年に學んだ。廿九年自ら原型を作り鑄工に鑄させる新方法で「流鏑馬銀置物」を作り、日本美術協會展に出品して金賞を得、御物となつた。又卅三年のバリ萬國博へは「救難」及び「愛」を出品し、私費を以つて渡佛し、卅六年官命で又渡佛した。美術學校教授中大正八年五十六歳で歿した。龜藏は廿九年美術學校彫金科を卒へ、大正八年母校教授に任ぜられ、金工科の主任となつてゐる。宗幸は江戸末期に幕府の打物御用をつとめた平田三之助重之の門人で、黒川勝榮、田子泰三郎と同門、又重光は重之の子で、矢張有名な打物師であつた。始めに彫金家の需によつて銀、隴銀の花瓶などを鋸起してゐたが、晩年自作を示して眞價を知られ、六十七歳にして帝室技藝員となつた。宗美は加賀大聖寺に生れ、代々金工で、父の九代宗光から象嵌、鐵鋸の法を學び、更に研究して、一枚の鐵板から複雑な形を打出す方法に成功し、廿九年日本美術協會展に瓶懸を出して三等賞を得、卅七年セントルイス萬國

博に「双獅子置物」を出して大賞を得たが、大正五年四十六歳で歿したのは惜しい事であつた。藏六の初代は龍文堂安之助に鑄金術を學び、古器の模造に長じ、孝明天皇の御印を鑄造し、又徳川慶喜の爲に征夷大將軍の双龍紐金印を作り、更に明治天皇御璽及び大日本國の金印を鑄造し、廿三年六十八歳で歿した。長男祝之助二代をつぎ、初代同様漢代の古銅器模造に妙を得てゐる。嘉幸は岡野東龍齋に蠟型鑄物を學び、明治七年起立工商會社の設立に當り、鑄造部主任として入つた。十一年パリ萬國博に「紅雀鼎形大香爐」を出品し、現に倫敦ケンシントン美術館に藏せられてゐる。廿六年大婚廿五年祝典に際し、各大臣奉獻の銀製「双鶴置物」、華族よりの銀製「龍馬置物」を作り、又「可美眞手命像」を鑄造した。雪聲は明治八年上京し、初め鈴木政吉方の職工として鑄造を習ひ、廿三年第三回内國勸業博に鑄銅「雲龍圖門扉」を出品して妙技二等賞を得、同年美術學校に入つた。卅年楠公銅像を鑄造し、四十三年井

上馨侯像を鑄た外、三十數軀の記念像を作つてゐる。此門から香取秀眞が出た。如雲は父高次郎の下で職工として働き、廿三年美術學校に蠟型を教へる爲め囑託となつて入つた。十四年第二回内國勸業博に「龍神玉捧秀卿圖」を出品した、秀卿は光雲の木彫を原型とし、龍神は如雲が作つた。廿三年岡倉校長の命で作つたと傳へられる鑄銅「濡獅子丸額」(東京美術學校藏)は佳作である。柏齋の祖父友吉郎は大砲や砲彈を鑄てゐたが、子藤兵衛は霰釜を巧に作り、其子が柏齋で、釜及び鐵瓶の製作に名がある。秀眞は雪聲に學び、卅年美術學校鑄造科を出で、作をする傍ら工藝、殊に金工史を研究し、著書も數種ある。又母校に講師となり、帝室博物館學藝委員ともなつてゐる。昭和二年帝展第四部新設に當り審査員となり、昭和四年帝國美術院會員に擧げられた。信夫は卅三年美術學校鑄造科を卒へ、直ちに母校助教授となり、教授に進み、大正十二年から歐洲に留學する事三年、内外の博覽會及展覽會に出品

5  
4

し、殊に近年新傾向の作品を發表してゐる。

漆工

蒔繪に柴田是眞、川之邊一朝、小川松民、白山松哉、池田泰眞、赤塚自得、植松抱美、六角紫水、迎田秋悦、梅澤隆眞、磯矢完山、辻村松華、戸島光孚、河面冬山、松田權六、螺鈿に片岡源一郎、塗師に富岡文太郎、吉田清次郎、推朱に推朱揚成がある。是眞については前代にも述べたが、初め古満寛哉に蒔繪を學び、後鈴木南嶺に四條派の繪を習ひ、又岡本豊彦にも學び、蒔繪繪畫ともに長じ、江戸末期から明治初期に亘る名工の一人である。明治十三年帝室博物館に献納した「蓮池鴨遊之圖」は遺作の一つである。一朝は幕府御用蒔繪師幸阿彌因幡及び蒔繪仕手頭武井藤助の門に入り、廿九年帝室技藝員となり、翌年東京美術學校教授に任ぜられた。遺作「石山瑩谷蒔繪文臺」は佛國萬國博に出品して名譽大賞を得、今宮内省に藏せられてゐる。松民は光琳派蒔繪の名家胡民の門に入り、明治九年米國を視察し、

歸朝後帝室博物館の御用掛となり、正倉院御物の整理に與つて古名作を研究し、模作にも巧であつた。美術學校創立の際、最初の漆工科教官となつたが、廿四年四十五歳で歿したのは惜しい事であつた。松哉は能登屋伊三郎に象眼を學び、小林萬次郎に蒔繪圖案を習ひ、卅八年美術學校教授となり、翌年帝室技藝員となつた。微細な技巧に得意で、羽毛の蒔繪に妙を得てゐた。泰眞は是眞の門から出で、古満系統の蒔繪に長じ、帝室技藝員となつた。自得は蒔繪を父に繪畫を狩野久信に學び、古典的作品に長じ、帝展第四部開設と同時に委員となり、昭和五年帝國美術院會員に擧げられた。抱美は蒔繪を父包民に圖案を光景に學び、内外博覽會に出品して屢々優賞を得た。紫水は廿六年美術學校漆工科を卒へ、岡倉等と共に古美術を調査し、後農商務省實業練習生として米國に留る事四年、更に歐洲に赴き四十一年歸朝し、母校教授となり、漆工科主任となつてゐる。漆工に關する古來の技法を研究し、正倉院

御物によつて末金鏤の應用作品を發表し、朝鮮樂浪の發掘品により漢代漆工の應用作品を發表した。秋悦は蒔繪を父嘉兵衛に學び、古典趣味の作品に長じてゐる。

陶工

陶磁工には竹本隼太、初代宮川香山、三代高橋道八、清風與平、加藤陶壽、諏訪蘇山、錦光山宗兵衛、石野龍山、二代香山、四代清水六兵衛、板谷波山、五代六兵衛、沼田一雅、宮永東山、河村蜻山、伊東陶山、高橋清山、中村秋塘、澤田宗山、富本憲吉、河合卯之助、河井寛次郎等がある。隼太は幕府旗本の子で、初め家茂將軍の小姓となつたが、明治元年廿一歳の時、製陶を試み、東京郊外高田に窯を築き、洋風の技術をも採り入れ、薩摩焼や交趾焼から漸時窯變の方に進み、廿二三年頃から名聲が擧つたが、廿五年四十五歳で歿したのは惜しい事である。初代香山は京都眞葛焼から出で、明治三年横濱南太田に開窯し、初め薩摩焼を作り、ついで石焼に

うつり、廿六年のシカゴ博覽會に和漢の古陶釉を用ひた一對の花瓶を出品し、卅三年のパリ萬國博に出品した「黄緑釉菊桐唐草花瓶」及「着彩薄肉花卉水盤」は代表作である。大正五年七十五歳で歿した。嗣子半山は父に學び、父の歿後香山の名をついでゐる。三代道八は二代道八、即ち仁阿彌道八の後を継ぎ、家名を墜さず、明治十二年六十九歳で歿した。與平は田能村直入に學び、五條坂に窯を築いて焼き、陶工として最初の帝室技藝員に擧げられた。陶壽は瀬戸で代々陶工たる加藤與八の次男に生れ、明治六年上京し、初め井上良齋に學び、轉じて勸業寮の洋法陶器試験場に入り、九年石膏模型使用法を研究し、之を瀬戸に傳へ、十二年鹽田眞、納富介次郎經營の江戸川製陶所に入り工長をつとめ、十五年自ら新小川町に友玉園と稱する製陶所を起し、ワグネルの試験所を其内に置きワグネル指導の下に、色釉藥の改良を謀り、白象嵌、紫、黄色を發明し、後赤色にも成功した。ゴットフリード・ワグネルは獨逸

ハノーヴェルに生れ、明治元年卅八歳にして來朝し、我が化學工業、殊に陶磁器、七寶について大いなる功績があつたが、廿五年駿河臺の寓居に歿した。陶壽は四十年工場を大崎に移し擴張を計つたが、半ばにして大正五年歿し、園の事業は遺族によつて繼がれてゐる。蘇山は金澤に生れ、廿三歳初めて陶畫を彩雲樓旭山に學び、古九谷を研究し、石川縣立工業學校に教鞭をとり、當時の作品は古九谷と誤られる。五十歳にして京都に遷り、錦光山製陶工場に入り、五十七歳五條坂に窯を開き、青磁、白磁、交趾等の研究をなし、堂々たる作品を發表し、大正十一年七十二歳で歿し、息子が襲名してゐる。宗兵衛は前代に栗田の名工であつたが、今の宗兵衛は明治元年生れで、家業をついで栗田仁清風のものを作つてゐる。龍山は金澤に生れ、初め中澤龍淵、垣内右隣に繪を學び、明治十二年八田逸山に陶畫を習ひ、十六年より獨立開窯し、四十一年特殊の赤色釉を完成し、石川製陶界の元老である。四代六兵

衛は前代末期の名工の後を承け、明治十六年三代の歿後、四代として大に努め、廿七年組合長に擧げられた。卅五年重患に罹り、名を長男栗太郎に譲り、六居と改名して時々製作し、大正九年七十三歳で歿した。五代六兵衛は父に製陶を學び、更に幸野楳嶺に四條派の繪畫を習ひ、父祖以來の名を墜さず、洋風をも研究し、セーヴル窯の結晶にも成功してゐる。帝展第四部の開設と共に委員となり、昭和五年帝國美術院會員に擧げられた。波山は廿七年美術學校彫刻科を卒へ、石川縣立工業學校に教鞭をとる傍、製陶を研究し、爾來彫刻より轉じて専ら陶業に没頭し、卅七年東京田端に開窯し、始めは彫刻應用の浮彫などを試み、後マツト色釉を研究し、獨特の作品を示してゐる。帝展第四部開設せらるゝや委員となり、昭和四年帝國美術院會員に擧げられた。一雅は初め竹内久一に彫刻を學び、卅三年パリ萬國博に出品して金牌を得、卅六年パリに赴き、ベルレー、サンドーズ等につき彫刻を學び、後國立セー

ウル製陶所に入り、彫刻陶器を研究し、卅九年歸朝後美術學校教授となり、大正九年再び渡歐し、佛、獨、丁等を見學し、爾來獨特の動物彫刻を陶化し、藝術的作品を公にしてゐる。七寶には濤川惣助、安藤重兵衛がある。惣助は早く七寶を研究して廿年頃、無線七寶、省線七寶を發明し、廿九年帝室技藝員に擧げられた。重兵衛は名古屋に生れ、十六年七寶の業を創め、改良に苦心し、卅六年理想の各色釉に成功し、海外輸出品其他の作品を出し、内外の博覽會で優賞を得る事百餘回に及んでゐる。

染織工

織工には伊達彌助、川島甚兵衛、金田忠兵衛、菅原直之助、龍村平藏、山鹿清華、染工には西村總左衛門、飯田新七、野口安左衛門、廣岡伊兵衛等がある。彌助は幕末京都に於いて、久しく關東に獨占されてゐた織工界から西陣の衰微を挽回せんとし、錦、金襴等の復古的作品を出すと共に、印度、支那の製法と伊太利の古織を研究し、之を應用した作品をも

發表したが廿五年五十四歳で歿し、養子虎市其業を繼いでゐる。甚兵衛は彌助に遅るゝ事十四年にして京都に生れ、父初代甚兵衛の業を繼ぎ、縮緬の發明、風通の改良に功があり、又唐錦、綴錦の製作に最も努力し、製作が頗る多い。代表作としては菊池芳文下繪にかゝる「花鳥山水綴錦壁張」で現にヘーグの平和宮の壁に在る。一つは「百花鳥綴錦」で、卅七年リエージの萬國博に出品し、現に宮中東溜間に懸けられてゐる。四十三年五十八歳で他界した。忠兵衛は江戸時代代々織物の名工として知られ、當代は十三世で、袋物用の間道、更紗等に長じてゐる。直之助は獨習を以つて刺繡に長じ、芳崖の「悲母觀音」の繡は、原畫の傑出せると共に有名である。平藏は少時から織物の研究に志し、先づ名物裂を研究して其複製を作り、次に正倉院裂の研究と其複製を試み、進んで漢代織物の研究に着手した。其複製以外のものも古典的圖案によるものが多い。古代織物の實際的研究家として特筆すべき人である。

清華は神坂雪佳に圖案を學び、のち刺繡及び手織錦の作品を發表し、斯界の新進作家として囑望されてゐる。總左衛門は慶長九年以來染物を業としてゐるが、かの宮崎友禪が創めた友禪染を得意とし、先代は安政二年生の人で、明治大正時代の友禪染に盡した第一人者である。

其他の工  
藝と圖案

以上金、漆、陶、染織の外の雜工藝としては先づ薩摩硝子がある。我國に硝子の製法を傳へたのは、元龜元年（西曆一五七〇）長崎に南蠻の玉工來朝して傳へたのが、天平時代にもあつたとすれば再興である。

所謂薩摩硝子と稱するものは島津齋興公の時、弘化三年（一八四六）精製藥館が創設され、其容器として硝子器が必要で、當時江戸源助町の住人四本龜次郎を傭聘した時から作られたと云はれる。爾來研究を重ね、黄金を以つて紅色硝子とした。切子は英船が鹿兒島に傳へたと云はれ、英國風のものであるが、江戸からも硝子工を招き、今日では薩摩切子と江戸切子とは區別し難い

ものがある。其後硝子工藝はあまり發達せず、大正の末年頃から白耳義、佛蘭西、獨逸等のものによつて新研究を試むるものが生じた。次に木彫に森川杜園、木内喜人がある。杜園は奈良彫の名手で、廿七年七十五歳で歿した。喜八は初め船大工であつたが、後鐵砲や鞘などを作り、明治となつて木工藝に遷り、卅五年七十七歳で歿した。牙彫は前代の根付彫に引續いて明治初期に盛んで、加納夏雄、石川光明、島村俊明なども初は牙彫をやつてゐた、髑髏を得意とした旭玉山も明治時代に名があつた。保坂光山は光明について牙彫を學び、清新な意匠で、牙角玳瑁を用ひて装身具、杖頭などを作つた。變つたものにはステインド・グラスに小川三知があり、モザイクに中丸精十郎、櫻井一忠がある。猶西洋木版に合田清、日本木版に橋口五葉、山本鼎、戸張孤雁、永瀬義郎、寫真製版に田中松太郎、エツチングに竹腰健造、田邊至、寺崎武男、長谷川潔、石版に織田一磨がある。工藝には圖案が主要である、



著名な圖案家としては岸光景、島田佳矣、杉浦非水がある。光景は初め畫を父に學び、後目賀田文村に師事し、古土佐や光悦、宗達、光琳等の畫風を慕ひ、其圖案にも自ら好める所が現はれた。漆工の一朝、抱民、金工の夏雄、勝珉、勝廣、秀鏡、彫刻の光明、俊明等に圖案を與へ、工藝の發達に大功があり、遂に圖案家として帝室技藝員に擧げられ、大正十一年八十三歳で歿した。佳矣は明治廿七年美術學校日本畫科第一期生として卒業し、圖案を研究し、卅一年母校に圖案科開設せらるゝと共に入つて教授となり、圖案科主任として圖案教育並に一般圖案界に盡すこと卅餘年、昭和七年教授を辭した。非水は玉章及び清輝に學び、卅四年美術學校日本畫選科を卒へて圖案の研究に入り、創作的才能を以つて獨特の圖案を發表し、圖案集を刊行し、大正十三年自ら中心となつて七人社を作り、大正十五年第一回創作圖案展を開いた。猶洋畫家で和田英作、藤島武二、和田三造、石井柏亭、太田三郎、津田青楓

等、日本畫家で結城素明等も圖案の筆をとつた事があり、廣川松五郎、恩地孝四郎、齋藤佳三等も新しい圖案家として知られてゐる。

### 五 明治大正美術の特色と價值

#### 第三次の模倣時代

日本美術史上で模倣を主とした時代は少くない。併し明治大正時代の如く顯著な模倣時代は、空前であつて恐らく絶後であらう。

かの飛鳥時代が朝鮮を経て支那の六朝を模倣し、白鳳天平時代が唐を模倣し、鎌倉室町時代が宋元を模倣した中では、天平時代の唐模倣が最も著しかつたのであるが、それすら明治大正の歐米模倣には遠く及ばないと思ふ。蓋し模倣の對象が從來のそれと大に違ひ、且つ交通機關が發達したからである。白鳳時代の我が文明と唐の文明とは、彼が進歩してはゐたが、廣く云へば同じ東洋で同性質のものであつた。飛鳥、鎌倉、室町皆然りである。然るに明治

大正時代に於ける歐米の文明は、我が江戸時代迄の文明とは性質が違つてゐた。美術、文學、教育、宗教、言語、風俗、習慣等、生活の内容形式悉く異り、一口に云へば我れの東洋文明に對して彼れは西洋文明である。しかも彼れは我れに比して非常な進歩を遂げ、それが室町時代以前には夢想せざる程發達した交通機關によつて非常な勢で輸入したのであるから、從來の東洋文明は根柢から覆され、一から十まで西洋模倣に陥り、すべて模倣と折衷を事とし、純然たる日本風は寥々たる有様となつて了つた。尤も其程度は時期によつて必しも同一でない。即ち第一期は一部に前代の遺風を存して大部分は暗黒時代に陥り、第二期は表面的に又降伏的に西洋模倣をなし、第三期はやゝ理解ある内容的、咀嚼的模倣をなし、第四期は洋風として完成し、中には國民的自覺又は個性の發展をなし、一方で折衷に成功するに至つた。斯く時期によつて相違があり、又美術の種類によつても差違があるが、大體に於いて

て歐米の模倣であり、日本美術史上、第三次模倣時代をなしてゐるのは明かな事である。

六つの特色

明治大正時代の美術の特色は、之を通じては歐米の模倣に在るが、猶他方面から觀察すれば六つの特色を數へることが出来る。第一は「非宗教的」といふ事である。これは既に桃山時代から著しい特色であるが、當代に至つて益々甚しい。第二は「現代的」といふ事である。桃山時代から近世に入つた我が美術史は、江戸時代に入つて近代的となり、當代に入つては現代的といふ事が出来る。明治元年は西暦一八六八年で、モネ、マネ等の印象派勃興の頃に當り、英のウィリアム・モリスが工房を建てたのは一八八一年である。而して當代の終末たる大正十五年は西暦一九二六年に當り、獨逸がバウハウスを設立した一九一九年よりも七年遅く、畫壇は既に後期印象派も過ぎて、野獸派が勢力を得、立體派、未來派も起つてゐるし、工藝ではア

ール・ヌーボ、セセツションは遠く二十年前から起り、正にパリの萬國裝飾美術博覽會によつて新傾向を現はした時である。夫等のものがシペリヤ鐵道によつて二週間目に我が國に流入するのであるから現代的とならざるを得ない。しかも一方では日本を始め東洋の風が西洋に影響を與へてゐる事も相當の程度で、西洋人の東洋研究も盛んとなり、茲に第三の特色として「世界的インクワイエーション」といふ事を擧げることが出来る。第四は「個性の發揮」といふ事である。これも桃山時代あたりから漸次著しく、江戸時代にも發揮されたが、當代となつては一層重んぜらるゝに至つた。歐米の模倣に隠れて個性の失はれたものもあるが、他の時代に比して個性の發揮は著しいと云へる。第五は「民衆的」といふ事である。これも江戸時代から著しくなつて來たが、當代はすべての點が民衆的であり、従つて美術に於ける民術的といふ特色は非常に高まつた。最後に「都會中心」といふ事である。而してかく歐米を模倣し又折衷して大に

進歩した明治大正の美術も首都東京が主であつて、次いで京都、大阪、名古屋の都會に及び、地方にはあまり及ばず、漸く大正になつて地方に普及しつゝある状態である。

價値の推斷

明治大正時代

明治大正の美術は、西洋の模倣で終始してゐるとは云へ、其價値は決して低いものではなく、之を從來の各時代に比べても大に優るものが多々ある。其第一に擧ぐべきものは繪畫の中の新日本畫である。既に其項で述べた通り、文展、帝展、院展に於ける新しい日本畫は、從來の大和繪と漢畫との系統に洋畫の影響を納れ、從來の日本畫とは全く違つた新しいものを作り出してゐる。故人となつた廣業、觀山、春草、紫紅、現存の栖鳳、大觀、玉堂、春舉、契月、素明、百穂、映丘、清方、五雲、翠璋、麥僊等の優作は大正の繪畫を代表するものである。而して芳崖と雅邦とは古い日本畫と新しい日本畫との過渡期の大家として、明治の繪畫を代表してゐる。

洋畫は未だ世界的大家を出さないが、黒田清輝の如きは佛國一流大家と伍して遜色がない。しかも我國の洋畫は始めてからの年數が僅か三十餘年なる事を思へば驚嘆すべき進歩で、今後の活躍はフランス畫壇については日本の洋畫壇であると云つてもよからうと思ふ。彫刻は從來の技法全く廢れて洋風彫刻の發達著しいものがあり、これも世界的大家は現はれないが、レベルは非常に高まり、展覽會製作の外、從來なかつた記念像にも相當見るべきものがある。工藝は在來の技法に洋風を加味し、意匠の新しいもの現はれ、金、漆、陶、染織其他の工藝すべて進歩を示したが、眞に新しい工藝としては帝展に工藝の加へられた昭和時代から始まるのではなからうか。明治大正の工藝は第三期第四期とも古典に洋風を加へた復興的時代であつた様に思はれる。最後に建築は様式に於いて洋風の輸入されると共に、第四期には材料、構造が新しい鐵骨混凝土のものとなり、從來の木造とは全く違つたものを生じた。

又目的が從來の神社佛寺と異り公共的のものとなつたので、全く新しい領地を開拓した。未だ世界的大傑作も現はれないやうであるが、明治大正の代表的建築として後世に遺るものは相當にあるであらう。其の間には材料様式ともに日本の古典を復興した明治神宮社殿の如きものがあり、又新材料によつて舊様式を現はしたものの、例へば歌舞伎座、明治神宮寶物殿の如きものもあるが、何れも時代を代表する建築である。何れにせよ明治大正の美術は、特色は十分に觀取する事が出来るが、其の價值に至つては之を判定すべく餘りに近いので、其の眞價は猶數十年の後に發揮されるものと思ふ。

# 人名索引

一、本索引は作家を主とし、成るべく多少説明あるものを掲げた。  
 一、エ、エ、イ、キ、カ、ク等は便宜上、同じ所に収めた。  
 一、五十音順によつたが第二語以下は正確になつてゐない。  
 一、姓名を擧げてあるが、號のあまり有名なもの、例へば歌麿、永徳の如きは、號からも引けるやうにした。

ア  
 青海勘七……………七二九  
 青木木米……………七三三  
 青山熊治……………八五八

イ  
 五十嵐道甫……………七三八  
 亞歐堂田善……………七二八  
 赤塚自得……………八八一  
 阿佐太子……………一三〇  
 浅井忠……………八四七  
 朝倉文夫……………八〇九  
 足利義政……………四四三、四四九、四六一  
 足利義滿……………四四三、四四七  
 安藤重兵衛……………八八六  
 安藤昭……………八二二  
 安藤廣重……………六九四  
 安阿彌……………四〇六  
 有島生馬……………八六〇  
 栗田口隆光……………四九〇

池田泰眞……………八八一  
 石井柏亭……………八五八  
 石川寅治……………八五九  
 石川光明……………八〇四  
 石野龍山……………八八四  
 石橋和訓……………八六三  
 院 信……………四八三  
 井關家重……………六七三  
 磯田湖龍齋……………六九二  
 板谷波山……………八八五  
 伊藤若沖……………七二〇  
 伊東忠太……………七七八、七八二、七九一、七九三  
 池 大雅……………七〇二  
 今尾景年……………八三四  
 今村紫紅……………七二七  
 伊孚九(清人)……………七二五

岩佐又兵衛(勝以)..... 六八四  
岩村透..... 八四九

ウ

植松包美..... 八八一  
宇喜多一惠..... 六七七  
歌川國芳..... 六九二  
歌川豐國..... 六九一  
歌川豐春..... 六九〇  
歌川豐廣..... 六九一  
歌磨..... 六九〇  
厩子皇子..... 六〇  
馬子..... 六三  
梅原龍三郎..... 八六〇  
運慶..... 四〇五、四〇八、四一四  
雲谷等顔..... 五八六  
海野勝珉..... 八七六  
海野美盛..... 八七六  
浦上春琴..... 七〇五

エ

榮西禪師..... 四五一  
永徳..... 五四五、五五六、五七九、五八二  
圓勢..... 三四三  
永樂善五郎(初代)..... 七三四  
圓珍..... 二四三  
惠心僧都..... 二六三、二八五、三〇〇、三〇四  
會理僧都..... 三〇五

オ

大江新太郎..... 七九一  
太田喜二郎..... 八六二  
應舉..... 七九  
大國柏齋..... 八七九  
岡倉覺三..... 八一九、八三〇  
岡崎雪聲..... 八七八  
小川破笠..... 七二九  
小川松民..... 八八〇

岡田三郎助..... 八四九

岡田信一郎..... 七七九、七九二  
岡田爲恭..... 六七八  
岡田半江..... 七〇五  
尾形光琳..... 六九七、七七  
岡本豐彦..... 七二二  
奥田穎川..... 七三一  
奥村政信..... 六八八  
萩原守衛..... 八二〇  
大熊氏廣..... 八〇五  
小倉右一郎..... 八一  
小栗宗丹..... 四九八  
大島如雲..... 八七九  
尾竹竹坡..... 八三九  
小田海倦..... 七〇五  
織田信長..... 五四一  
大村西屋..... 八四六

カ

快慶..... 四〇六、四一四

懷月堂..... 六八五  
海北友松..... 五八五  
可翁..... 四二、四八九  
香川勝廣..... 八七六  
柿右衛門..... 七三四  
覺助..... 二九〇  
覺猷..... 三五三、三五七  
岸駒..... 七三  
華山..... 七〇六  
加集珉平..... 七三七  
鑑真..... 一四三、一六一  
片山滿國..... 六四〇  
勝川春章..... 六八九  
薦飾北齋..... 六九三  
加藤陶齋..... 八八三  
香取秀真..... 八七九  
金山平三..... 八六三  
金岡..... 三三九

金田忠兵衛..... 八八七

狩野永徳..... 五四五、五五六、五七九、五八二  
狩野興意..... 六七九  
狩野山樂..... 五四六、五七九、五八三  
狩野典信(榮川)..... 六八三  
狩野探幽..... 五三四、六三三、六七九  
狩野常信..... 六一  
狩野尙信..... 六八二  
狩野夏雄..... 八〇二、八七五  
狩野芳崖..... 八二七  
狩野正信..... 五〇二  
狩野元信..... 四九〇、五〇二  
狩野安信..... 六三六  
鹿子木孟郎..... 八四七  
鑄木清方..... 八三九  
川合玉堂..... 八三四  
川上冬崖..... 八四三  
川島甚兵衛(二代)..... 八八七  
河成..... 三三九

川之邊一朝..... 八八〇

川端玉章..... 八一七  
川端龍子..... 八四〇  
川村清雄..... 八四五  
其一..... 七〇一  
吉川靈華..... 八三七  
菊池芳文..... 八三五  
菊池契月..... 八三九  
木子清敬..... 七七八  
錦光山宗兵衛..... 八八四  
岸光景..... 八六七、八九〇  
岸竹堂..... 八三九  
岸連山..... 七一四  
岸田劉生..... 八六五  
北尾重政..... 六八九  
喜多川歌麿..... 六九〇  
北村四海..... 八〇九

キ

北村西望……………八二  
 北村正信……………八三  
 行信僧都……………一五九  
 行基……………一〇二  
 木原義久……………六三、六三二、六三五  
 祇南海……………六四二、六五二、六六三  
 キヨソネ(伊國人)……………七〇一  
 清長……………八四三  
 清水六兵衛(初代)……………六八七  
 同……………七三  
 同(四代)……………八八四  
 同(五代)……………八八五  
 九鬼隆一……………八六九  
 釧雲泉……………七〇七  
 國澤新九郎……………八四四  
 鍛形惠齋……………六九〇  
 熊谷守一……………八六〇  
 久米桂一郎……………八四八

ク

黒田清輝……………八四八  
 ケケ  
 藝阿彌(眞藝)……………四九五、四九六  
 慶恩……………四三〇、四三三  
 啓書記……………五〇〇  
 源琦……………七二〇  
 乾山……………六九九  
 コゴ  
 小出檜重……………八六〇  
 幸阿彌長重……………七七八  
 幸阿彌道長……………五三三  
 光悦……………五八八、五九五、五九九  
 迎田秋悦……………八八二  
 康永……………四八三  
 康圓……………四二一  
 康慶……………四〇四、四〇七、四一四  
 慶尙……………二八九

康勝……………四二一  
 康辨……………四〇七、四一〇  
 康琳……………四八三  
 光琳……………六九七、七二七  
 高隆古……………六七八  
 弘法大師……………二〇二、三〇〇、三三三  
 二三四、三四四  
 甲良宗廣……………五七六、六三三、六六三  
 古礪……………六八四  
 吳春……………七一  
 兒島虎次郎……………八六二  
 吳洲權兵衛……………六三四  
 小杉未醒……………八五六  
 五姓田芳柳(一世)……………八四三  
 同義松……………八四三  
 幸野模嶺……………八二九  
 後藤顯乘……………七二五  
 後藤光乘……………五九二  
 後藤才次郎……………七三八  
 後藤祐乘……………五二〇

コンドル(英國人)……………七三三  
 木島櫻谷……………八三八  
 小林如泥……………七三〇  
 小林古徑……………八四〇  
 古満休意……………七三九  
 小室翠雲……………八一七  
 小山正太郎……………八四五  
 惟久……………四七七

サ

齊藤素巖……………八三  
 酒井抱一……………六九九  
 榊原紫峰……………八四一  
 坂本繁二郎……………八六〇  
 佐久間大膳勝之……………七二六  
 櫻井雪館……………七二五  
 三光坊……………四八三、五七  
 山東京傳……………六八九  
 山樂……………五四六、五七九、五八三

サンツヨバンニ……………八四二

シジ

椎原市太夫……………七三九  
 椎名伊豫吉次……………七三六  
 椎名兵庫吉綱……………七三六  
 新海竹太郎……………八〇七  
 神功皇后……………四三  
 司馬江漢……………七二七  
 柴田是眞……………七三〇、八八〇  
 謝蕪村……………七〇三  
 寫樂……………六九三  
 司馬達等……………七九  
 鹽川文麟……………七三、八二九  
 島村俊明……………八〇四  
 島田佳矣……………八九〇  
 清水龜藏……………八七七  
 下村觀山……………八三三  
 下村晴時……………八四

舜慶……………四八五  
 秋月……………五〇一  
 珠光……………四五一  
 周文……………四九三  
 秀文……………四九四  
 松花堂昭乘……………六九五  
 祥啓……………五〇〇  
 聖德太子……………六、六五、一五九  
 聖武天皇……………一四〇、一四三、一四九、一五六  
 松雲……………六六九  
 如拙……………四八九、四九二  
 祥瑞……………五二四  
 白井雨山……………八〇六、八〇七  
 白河天皇……………二七六  
 白瀧幾之助……………八六一  
 白山松哉……………八八一  
 菅原直之助……………八八七

ス

杉浦非水……………八九〇  
 鈴木嘉幸……………八七八  
 鈴木長次……………六三三、六三八、六四三  
 鈴木長恒……………六五三、六六三  
 鈴木春信……………六七八  
 住吉具慶……………六七七  
 住吉如慶……………六七六  
 諏訪蘇山……………八八四

セ

清風與平(初代)……………七三三  
 是 閑……………五七七  
 關野 貞……………七七八、七八三  
 千宗易(利休)……………五四八、五五七  
 雪 舟……………四九八、五〇一  
 雪 村……………五〇一  
 相阿彌(真相)……………四九五、四九六

タ

曾我蛇足……………四九八  
 曾我直庵……………五八一、五八七  
 曾我二直庵……………五八八  
 曾我蕭白……………七一九  
 宋紫石……………七二六  
 宗 達……………六九五  
 會山(大野)幸彦……………八四六  
 大雅堂……………七〇二  
 湛海律師……………六六九  
 隆 兼……………四二一、四三三、四三四  
 高橋道八(初代)……………七三三  
 同 (三代)……………八八三  
 高橋由一……………八四三  
 高久靄崖……………七〇七  
 高村光雲……………八〇三  
 高村東雲……………八〇二  
 隆 能……………三五二、五五六

湛 慶……………四〇六、四一〇

竹内隼太……………八八二  
 竹内栖鳳……………八三五  
 竹内久一……………八〇三  
 武石弘三郎……………八二三  
 多須奈……………七九  
 建昌大夢……………八一〇  
 龍村平藏……………八八七  
 辰野金吾……………七七七  
 伊達彌助……………七四三、八八六  
 田中訥言……………六七七  
 谷文晁……………七三一  
 探 幽……………五三四、六三三、六三九  
 田能村竹田……………七〇八  
 俵屋宗達……………六九五  
 平清盛……………三三三  
 玉椿象谷……………七三〇  
 爲 成……………三〇一  
 爲 恭……………六七八

チ

竹 田……………七〇八  
 定 覺……………四〇六  
 直 庵……………五八一、五八七  
 重 源……………三九〇  
 定 慶……………四〇六、四〇九、四一五  
 長次郎(長祐)……………五九八  
 長 勢……………二九〇  
 定 朝……………二七五、二八九、二九三、二九七  
 陳和卿……………一七〇  
 沈南蘋……………七二五  
 齋 然……………二九七  
 塚田秀鏡……………八七六  
 塚本 靖……………七七八、七八三  
 津田信夫……………八七九  
 津田青楓……………八六〇

ツ

土田麥僊……………八五九  
 都路華香……………八三八  
 辻良治良……………五九四  
 常 信……………六一一  
 椿 椿山……………七〇七  
 テテ  
 傳教大師……………二〇〇、二一七  
 寺崎廣業……………八三三  
 トド  
 藤四郎……………四三三  
 東洲齋寫樂……………六九二  
 堂本印象……………八四一  
 徳川家康……………五四〇  
 土佐光起……………六七六  
 土佐光信……………四九一  
 曇 徴……………八六、二一八  
 鳥羽僧正(覺猷)……………三五二、三五七

チ

豊臣秀吉……………五三三、五三九、五四四、五五〇、五五八  
 豊臣秀頼……………五六五  
 鳥居清信……………六八七  
 止利佛師……………八三  
 ナ  
 内藤 伸……………八二二  
 尙 信……………六八二  
 中井正清……………六三三  
 中川八郎……………八五四  
 中澤弘光……………八五六  
 長澤蘆雪……………七二〇  
 中林竹洞……………七〇五  
 長原孝太郎……………八六一  
 長沼守敬……………八〇六  
 中村 彝……………八五五  
 中村日向吉次……………五五三、六四三  
 中村不折……………八五三  
 浪越彌七郎……………五一二



名越家昌……………七三五  
名越三昌……………五九四  
濤川惣助……………八八六  
奈良秀次……………五二二  
奈良利壽……………七二五

二

西川祐信……………六八八  
西村總左衛門……………八八八  
西山翠峰……………八三九  
仁清……………七三三  
二直庵……………五八八

又

貫名海屋……………七〇五  
沼浪弄山……………七〇五  
沼田一雅……………七三九、八八五

能阿彌(真能)……………四九五  
能代熊斐……………七二六  
野々村仁清……………七三二、七三九  
信實……………四三〇

ハ

橋本雅邦……………八一九、八二八  
橋本關雪……………八四〇  
長谷川榮作……………八三三  
長谷川等伯……………五六一、五八〇、五八七  
秦藏六(初代)……………八七八  
范道生……………六七〇、六七一  
英一蝶……………七一九  
原田直次郎……………八四六

ヒ

日向守家次……………五七二  
久隅守景……………六八一  
菱田春草……………八三七

マ

前田青郎……………八三九  
正宗得三郎……………八六〇  
松尾儀助……………八六六  
松岡映丘……………八四〇  
松岡壽……………八四六  
松田亮長……………七三三  
松村景文……………七三三  
松村月溪(吳春)……………七一一  
圓山應舉……………七〇九

ニ

三浦乾也……………七四〇  
明兆……………四九一  
光起……………六七六  
滿谷國四郎……………八五三  
光長……………三五二、五五八  
光信……………四九一

菱川師宣……………六八五、六八六  
左甚五郎……………五七六、六三〇  
日野資業……………二八三  
日野對山……………七〇六  
平賀鳩溪……………七二七  
平櫛田中……………八一  
平田宗幸……………八七七  
平福穗庵……………八二九  
平福百穗……………八四〇  
廣重……………六九四  
廣高……………三〇〇

フ

フエノロサ(米國人)……………八二〇  
フォンタネシ(伊國人)……………八四二  
服南郭……………七〇一  
福田平八郎……………八四二  
藤島武二……………八四九

水谷鐵也……………八二三  
南薰造……………八五七  
宮川香山(初代)……………八八二  
宮川長春……………六八八  
三宅克巳……………八六三  
宮崎友禪……………七三、七四三  
宮田筑後……………六七三  
宮本二天……………五八八  
明珍宗安……………五〇八

ム

夢窓國師……………四五一

モ

森狙仙……………七一  
元信……………四九〇、五〇二、五五六  
守景……………六八一、七三八

ヤ

藤田嗣治……………八六五  
藤田文藏……………八〇五  
藤原清衡……………三三九  
藤原頼通……………二七八  
藤原秀衡……………三三〇  
藤原基衡……………三三〇  
藤原道長……………二七五  
文清……………四九三  
蕪村……………七〇三

ホ

平内正信……………六三三、六三五  
本阿彌光悅……………五八八、五九五、五九九  
抱一……………六九九  
望玉蟾……………七四  
北齋……………六九三  
堀進二……………八二二

昭和八年一月七日印刷  
昭和八年一月十日發行

〔定價金四圓五拾錢〕  
〔特價 金 四 圓〕

著 作 權 所 有



發 行 所

東京市神田區錦町一丁目  
電話神田代表二一二六番  
振替東京六二九四番

誠 文 堂

著 者 黑 田 鵬 心

發 行 者 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
小 川 菊 松

印 刷 者 東京市芝區田村町二丁目五番地  
一 噌 連

安田靱彦……………八三八

山鹿清華……………八八八

山上嘉廣……………六五六

山口雪溪……………七〇四

山崎朝雲……………八〇八

山下新太郎……………八六〇

山田右衛門作……………七七七

山田鬼齋……………八〇四

山田道安……………五〇五

山田宗美……………八七七

大和眞盛……………六七三

山元春舉……………八三三

山本芳翠……………八四四

山本森之助……………八五四

ユ

湯淺一郎……………八六〇

結城素明……………八三三

友松……………五八五

雄略天皇……………四三三

ヨ

横河民輔……………七八二

横谷宗珉……………七二五

横山大觀……………八三三

横山文六……………八四五

吉田三郎……………八二二

吉田 博……………八五六

米原雲海……………八〇八

ラ

ラゲーザ(伊國人)……………八〇〇

リ

利 休……………五四八、五五〇、五九七

理源大師……………二七六、二九〇

柳里恭……………七〇二

ロ

六角紫水……………八八一

六郎(宋人)……………四七七

蘆 雪……………七〇〇

良辨僧正……………一七一

ワ

ワグネル(獨人)……………八八三

ワীগマン(英人)……………七八八、八四三

和田英作……………八五三

和田三造……………八五五

渡邊華山……………七〇六

渡邊長男……………八三三

# 版定決 師繪世浮大六

## 野口米次郎先生著

本書こそ日本で作られた最も優美な國際的出版  
 の一大標本である。  
 「彼の詩は恰も夜の泪に濡れぬれた一叢の躑躅  
 の花か、或は滴れ散る言の葉のその数々の音を  
 立てぬ響の如し」とは詩人大使ポオル・クロオ  
 デルの「ヨネ・ノグチ」を評した評言であるが、こ  
 の詩的情趣が本全集のテキストに流れてゐる。  
 故にこの六冊の書は大浮世繪畫集の完成である  
 と共に、この世界的詩人ヨネ・ノグチの文學が  
 凝つて結晶したものである。各圖の解説は玉の  
 珠數となつて麗光を放つてゐる。

- (1) 鈴木春信  
虹のやうに卒然として天  
 空にかゝる春信の作品集  
 清長の藝術は世にも不思  
 議な均齊美の表現である  
 著者が「最後の歌麿」と  
 して世界に誇る可き逸品
- (2) 鳥居清長  
クルトの「寫樂」の約倍數  
 の原畫を紹介したる寫樂  
 北齋の繪畫を最善に代表  
 する作品三百の大畫集
- (3) 喜多川歌麿  
日本隨一の國民畫家廣重  
 の代表作を悉く收めた物
- (4) 東洲齋寫樂
- (5) 葛飾北齋
- (6) 一立齋廣重

■全六冊入優美書庫  
 ■浮世繪版畫用上等額椽

本漆塗本仕上げ金文字  
 入房 附定價金貳圓  
 (送料四十錢)  
 浮世繪にふさはしき  
 優雅高尚のもの定價  
 金一圓(送料四十錢)

- ▽四六倍判天金豪華版△
- ▽三色版數葉挿入函入△
- ▽定價各冊金五圓△
- ▽送料各三十三錢△



59  
43

著心鵬田黒士學文

說概史術美本日

第十册	第九册	第八册	第七册	第六册	第五册	第四册	第三册	第二册	第一册
明治大正時代	江戸時代	桃山時代	室町時代	鎌倉時代	藤原時代	弘仁時代	天平時代	飛鳥及白鳳時代	序說及原始時代

以上十册完結

取揃御注文に應ず

定價	各册	金五拾錢
送料	一册	金四錢
	二册	金六錢
	五册	金十錢
	十册	金十四錢

發行所

東京市澁谷區青柳一〇  
趣味普及會  
電話青山七四三  
振替東京三七七〇四

發賣所

東京市神田區錦町一の一九  
誠文堂  
電話東京二二二六  
振替東京六二九四

597

430

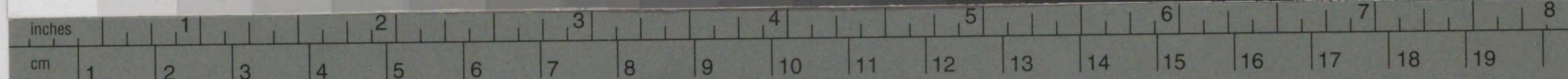


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

